

平成 30 年 6 月 17 日現在

機関番号：33902

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25380179

研究課題名(和文) イギリスの領土紛争としてのフォークランド戦争の研究

研究課題名(英文) The Falklands War as a conflict on territory

研究代表者

梅川 正美 (UMEKAWA, MASAMI)

愛知学院大学・法学部・教授

研究者番号：30135280

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：申請者は2008年に出版した『サッチャーと英国政治』第3巻ですでに、フォークランド戦争について132頁の論文を掲載した。しかしこのとき非開示であった公文書が2013年に原則公開となった。

2013年から2017年までの研究助成事業期間に3回の資料収集を行い、研究に必要な公文書を取得した。既発表論文の骨組は再確認された。そのうえで、骨組みに肉付けする材料のコレクションを作成した。現在、その内容を精査しながら、順次、論文化を行っている。イギリスの研究者との交流も行い研究水準の高度化を図っている。資料の整理を進めて、フォークランド戦争についての新しい単著の出版をしたいと考えている。

研究成果の概要(英文)： I published my book 'Thatcher and British Politics' in 2008. It contained a chapter concerning the Falklands War in 1982. Thatcher waged the war with Argentina to keep the small islands. British Government wanted to get enough support from the Government of the United States. The relationships between the two governments were not always clear in 2008. There were many other points I could not get evidence to understand. However, public documents of the War became open in 2013.

My purpose was to investigate documents opened in 2013. I visited England three times and collected as many documents as possible during the five years from 2013 to 2017. I went to the National Archives in London, the Churchill Archives in Churchill College in Cambridge University and the Modern Records Centre in the University of Warwick in order to get various documents of the Falklands War. I made a big collection and started to write essays. I will make a new book as soon as possible.

研究分野：政治学

キーワード：フォークランド 領土 戦争 外交 安全保障 内閣制度 英米関係 サッチャー

1. 研究開始当初の背景

(1) 現代社会の背景

現代社会では、国際的に、どの国であっても、国境紛争をかかえている。日本においても尖閣諸島、竹島、北方領土などの領土問題に直面している。イギリスは19世紀には大英帝国を樹立したが、今日までにほとんどの主要な領土を失った。しかしわずかに残存する領土の一部がフォークランド諸島であり、この諸島をめぐる戦争が1982年に発生する。この戦争の勃発の要因と経過および影響について研究することは、今日の領土問題解決にとってきわめて重要であった。

(2) 研究の背景

研究を開始した2013年当時、フォークランド戦争に関する研究は、日本ではほとんど行われていなかったが、申請者は『サッチャーと英国政治』第3巻(成文堂2008年)において、132頁にわたって、フォークランド戦争について論じている。しかし、2008年時点では、フォークランド戦争に関する公文書は、まだ開示されていなかった。そこで、当該図書は、当時において入手できるかぎりの資料をつかって著述している。しかし、2013年には、公文書の開示が行われたので、この公文書の収集と整理およびそれに基づく新しい研究が可能になった。これが重要な研究背景であった。

2. 研究の目的

(1) 資料の調査、収集、整理

第1に、ようやく2013年に公開された公文書の調査、収集、整理が、最初の目的であった。その内容は、公開前に予測していた水準をはるかに凌駕するものであった。本来なら、2年くらいイギリスに住みこんで調査する必要があるほどの膨大な分量であった。そこで、科研費の旅費で資料収集のための出張をおこない、その範囲で可能なかぎりの調査、収集をおこなった。

第2に、申請者の著書『サッチャーと英国政治』第3巻を2008年に出版して以降発表された膨大な研究(二次資料)もあるので、これを収集することも目的とした。さらに、収集した資料や文献の整理にも取り組んだ。

(2) イギリスの研究者との交流、論文執筆、図書出版、学会発表

第1に、イギリスの専門家の研究者との交流が必要だったので、彼らと継続的に共同研究を行った。

第2に、資料整理の途上ではあれ、フォークランド戦争について、書けるところから論

文の執筆を行うこととした。

第3に、フォークランド戦争を含む総合的な政治について研究することとして、このために図書も出版した。

第4に、フォークランド戦争について外国の研究者と議論することであり、そのために国際学会でも発表した。

3. 研究の方法

(1) 資料の収集と整理

第1に、1982年のフォークランド戦争に関する「イギリス公文書館」所蔵の資料は2013年から原則公開になり、ここでの資料収集が重要な諸目的の一つであった。そのために、公文書館への出張だけで2回行った。

第2に、戦争中の兵士の状態を調査するためにイギリスのウォリック大学現代史資料館にも調査のための出張を行った。合計するとイギリスへの調査出張は3回になる。

第3に、ケンブリッジ大学チャーチル・カレッジのチャーチル・アーカイヴにはマーガレット・サッチャーMargaret Thatcherの資料を保管しているので、2014年には公文書館に加えて、ケンブリッジ大学にも資料調査に行った。

第4に、申請者が2008年に出版した『サッチャーと英国政治』第3巻(成文堂)の時点以降の膨大な研究書を収集する作業も行った。申請者は、二次資料も重視しており、できるかぎりの文献収集を行った。

(2) イギリスの研究者との交流

第1にイギリスについての研究は、本場イギリスの研究者とよく交流し協力することが、研究水準を維持するうえで重要である。そこで本研究の協力者である英国ウォリック大学教授であるジョン・マッケルダウニーJohn. F. McEldowney教授には、申請者の出版図書への論文寄稿、講演、議論などで支援していただいた。

第2に、エディンバラ大学のガレイ・ナブラジ・シンGhaleigh Navraj-Singh講師に議論の相手をしてもらった。

第3に、エディンバラ大学のクリス・ヒムズワースChris Himsworth名誉教授にも、講演や議論で協力をしていただいた。

(3) 論文執筆、図書出版、国際学会報告

第1に、収集した資料は膨大なものであり、その整理は、まだ途上である。特に英米関係や、内閣での決定と実施状況や、戦争の実行過程の資料などが、多く残っている。資料の本格的な整理と、研究書の出版は、今後の課題として残っているものの、本研究の助成事業期間中に、直接的なフォークランド戦争についての論文、さらにその背景についての論

文の執筆を行った。

第2に、フォークランド戦争をふくむ総合的な図書の出版を行った。

第3に、学会でもフォークランド戦争について発表を行った。

4 研究成果

(1) 資料収集

第1に、資料収集は、具体的には3回行った。収集先は、イギリス・ロンドンの公文書館(The Public Records Office, National Archives)、ケンブリッジ大学チャーチル・カレッジのチャーチル・アーカイヴ(The Churchill Archives, Churchill College, Cambridge University)さらにウォリック大学の現代史資料館(The Modern Records Centre, Warwick University)である。

第2に、日程的には、次のように行った。1回目:2014年3月11-23日(PRO)、2回目:2014年8月11-21日(PRO・Churchill Archives)、3回目:2016年8月22-30日(The Modern Record Centre, Warwick University)。

第3に、収集した資料は、写真にして1万枚をこえる。一部の例を示すと、例えば首相関係資料(PRO:PREM32/14, PREM32/5, PREM19/617, PREM19/622, PREM19/623その他)、外務省関係資料(PRO:FCO7/4610, FCO7/4404, FCO7/4920, FCO7/4913, FCO7/4898, FCO7/4532, FCO7/4533, FCO7/1234, FCO7/4537その他)、内閣関係資料(PRO:CAB292/21, CAB292/82/1, CAB292/82/2, CAB164/1621, CAB164/1622その他)、戦時内閣関係資料(PRO:WO305/5907その他)、軍関係資料(PRO:DFEF58/264, DFEF58/281その他)、戦争での指揮官記録(PRO:ADM202/881, ADM202/882, ADM202/883その他)兵士関係資料(Warwick, Modern Record Centre, MSS175A-145, MSS175A/146, MSS175A/147その他)。

(2) 文献収集

第1に、文献収集の方針としては、フォークランド戦争そのものに関する文献、例えば、Max Hastings, *The Battle for the Falklands*, PanやMartin Middlebrook, *The Falklands War*, Martin Middlebrook Paperbackをはじめ多く収集した。

第2に、戦争一般についての文献など、ひろく収集した。その理由は、そもそもフォークランド戦争が発生した原因の一般的な考察と、戦争を回避するための方法の考察、および戦争を合理化する理論の研究が必要だからである。このような戦争に関する哲学的な原理論的な研究はG.M.Reichberg (ed.), *The Ethics of War*, BlackwellやHugo

Grotius, *The Rights of War and Peace*, AMCさらにRichard Tuck, *The Rights of War and Peace*, Oxfordなどをはじめとして多く収集した。

(3) 研究者との交流

第1に、本研究に対しては、イギリスのウォリック大学法学部のジョン・マッケルダウニー教授の協力をいただいている。申請者がイギリスを訪問するたびに、フォークランド戦争についての示唆を頂いた。またフォークランド戦争は、イギリスの安全保障上の危機対応であったが、申請者が2013年に編集して出版した『比較安全保障』(2013、成文堂)の本では、マッケルダウニー教授にイギリスの安全保障について執筆してもらった。さらに、フォークランド戦争は、イングランドの帝国主義の戦争でもあったので、この点について、マッケルダウニー教授には、2015年9月1日に、申請者が所長をしている愛知学院大学国際研究センターで講演会をもらった。

第2に、エディンバラ大学のガレイ・ナブラジ・シン講師には、スコットランドの立場からの安全保障について、2015年4月11日に、愛知学院大学国際研究センターで講演してもらった。また、エディンバラ大学名誉教授クリス・ヒムズワース先生にも、2015年9月2日に名古屋を訪問された際に、安全保障について、多くの示唆を頂いた。

(4) 論文、図書、学会報告

第1に、申請者が、本研究期間中に発表した論文は、特に戦争の勃発要因に関する「フォークランド戦争の前兆(1)」(2015年)や「フォークランド戦争の前兆(2)」(2016年)さらに「フォークランド諸島をめぐる戦争を防止できなかったのはなぜか」(2014年)である。他方で申請者は、戦争中の兵士と軍の間の関係の研究も開始しており「フォークランド戦争と船員組合(1)」(2018年)を執筆した。しかし、フォークランド戦争の全般的で総合的な研究書の出版のためには、資料の総合的な整理の完了が必要であり、これは今後の課題として残っている。

第2に、フォークランド戦争は、イギリスの国際的なプレゼンスをどのように示すかという問題でもあり、このような観点からは、フォークランド戦争後のイギリスの態度を検証するため論文「イギリスのEU離脱と政治機構」(2017年)を執筆した。このEU離脱については、さらに英語論文'Referendums in Britain and Japan'(2016年)を発表している。

第3に、図書を出版した。フォークランド戦争は、イギリス安全保障の文脈で理解されるが、そのために申請者が、編集・執筆したのが『比較安全保障』(2013年)である。ま

た、フォークランド戦争は、イギリス政治史の重要問題であるので、戦後政治史一般を総括するために申請者が編集・執筆した図書が『イギリス現代政治史(第2版)』(2016年)である。さらに戦争を行ったイギリスの政治のしくみを総論的に議論するために、同じく申請者が編集・執筆したのが『現代イギリス政治(第2版)』(2014年)である。フォークランド戦争はイギリスのナショナリズムの現代的なありかたも示しているが、倉持孝司編著『スコットランド問題』(2018年)で、申請者は、ナショナリズムについて論じている。

第4に、国際学会の報告としては、申請者は、2014年に九州大学で行われた、韓国と日本の共同学会で、‘Falkland=Malvinas Islands Conflicts - Lessons for Asia’ (2014 Korea-Japan International Joint Seminar hosted by Kyung Hee Institute for Human Society, 2014, Kyusyu University)の発表を行っている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計9件)

梅川正美「フォークランド戦争と船員組合(1)」愛知学院大学宗教法制研究所紀要 58号、査読無、2018年、1-30頁。

梅川正美「イギリスのEU離脱と政治機構」愛知学院大学論叢『法学研究』58巻1・2号、査読無、2017年、1-30頁。

梅川正美「フォークランド戦争の前兆(2)」愛知学院大学論叢『法学研究』57巻3・4号、査読無、2016年、1-18頁。

梅川正美「マグナ・カルタ800周年を日本で考える」愛知学院大学法学部同窓会『法学論集』第5巻、査読無、2016年、359-379頁。

Masami Umekawa, ‘Referendums in Britain and Japan’, 愛知学院大学論叢『法学研究』57巻1・2号、査読無、2016年、125-129頁。

梅川正美「英国2015年総選挙(分裂に

直面する時代)」陸上自衛隊修親刊行事務局『修親』、査読有、2015年、2-5頁。

梅川正美「フォークランド戦争の前兆(1)」愛知学院大学論叢『法学研究』56巻1・2号、査読無、2015年、61-81頁。

梅川正美「フォークランド諸島をめぐる戦争を防止できなかったのはなぜか」愛知学院大学論叢『法学研究』55巻3・4号、査読無、2014年、207-240頁。

梅川正美「小堀眞裕著『ウェストミンスター・モデルの変容(日本政治の「英国化」を問い直す)』(法律文化社、2012年)の書評」愛知学院大学論叢『法学研究』54巻3・4号、査読無、2013年、133-140頁。

[学会発表](計4件)

梅川正美「イギリスは分裂するのか(小さな国になる夢)」愛知県立学校・地歴公民管理職研究会、2015年。

梅川正美「マグナ・カルタ800周年に、不変のイギリス憲法の今日的意義を考える」岐阜大学地域科学部法学研究会、2015年。

Masami Umekawa,

‘Falkland=Malvinas Islands Conflicts - Lessons for Asia’, 2014, Korea-Japan International Joint Seminar hosted by Kyung Hee Institute for Human Society, 2014.

梅川正美は司会「日韓・外交シンポジウム」(報告者は日本側からは木宮正史・東京大学教授をはじめ5名、韓国側からは陳昌洙・世宗研究所日本研究センター長をはじめ5名)2013年。

[図書](計4件)

梅川正美、倉持孝司、力久昌幸他3人

『スコットランド問題（憲法と政治から）』総 160 頁、梅川執筆 125-155 頁、法律文化社、2018 年。

梅川正美、阪野智一、カ久昌幸他 8 人『イギリス現代政治史（第 2 版）』総 298 頁、梅川は編集および執筆 133-156 頁、ミネルヴァ書房、2016 年。

梅川正美、阪野智一、カ久昌幸他 8 人『現代イギリス政治（第 2 版）』総 259 頁、梅川は編集および執筆 60-80 頁、成文堂、2014 年。

梅川正美、倉持孝司、マッケルダウニー他 8 人『比較安全保障』総 288 頁、梅川は編集および執筆 60-92 頁、成文堂、2013 年。

〔その他〕

梅川正美「サッチャーの雑貨屋市場主義」京都新聞ほか 12 紙に掲載、2013 年。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

梅川正美 (UMEKAWA Masami)
愛知学院大学・法学部・教授
研究者番号：30135280

(2) 研究協力者

ジョン・マッケルダウニー John McEldowney 英国ウォリック大学教授。
ガレイ・ナブラジ・シン Ghaleigh Navraj-Singh 英国エディンバラ大学講師。
クリス・ヒムズワース Chris Himsworth 英国エディンバラ大学名誉教授。